



やればできると 夢の21世紀型農業 その礎を築きたい

飯

飯土井橋を渡り、坂道を上っていくと、眼下に白いネットで覆われた一画が目に入ります。よく見ると、中には植木鉢のようなものがズラリ。いったい何だろうと思つて通り過ぎていた人もいたでしょう。そこは休耕田を利用し、宇井一二さんがブルーベリー栽培に挑戦している圃場です。幼いころから農業を手伝ってきた一二さんですが、稲作中心の農業に限界を感じ「せっかくこの土地に生まれ育つたのだから、農業をなんとかしたい」と、新たな農業経営を心のどこかで、ずっと模索していました。

小

小代わりにも米作りに活かせたらと、参考書代わりに読んでいた『現代農業』のブルーベリーが、ふと一二さんの目に留まりました。そこには、ブルーベリーを鉢などに植えて栽培する、バッグ栽培システムを実践した人の記事が……。目によく、抗酸化作用があり、需要の拡大が見込まれるブルーベリー。苗を植えてから収量が上がるまでに数年を要するため、国内生産が追いつかず、輸入に頼っているのが実状です。しかし、この方法ならば、2年後には十分な収穫が見込め、経済性

だけでなく、地域の活性化や遊休農地の活用にもつながる。長年探し続けてきたものを、一二さんが見つけた瞬間でした。

平

平成17年の10月に、休耕田を含む約2、300㎡の草を刈り整地し、井戸を掘り、電気を引き、養液ブランドを敷地内に建設。防草シートを敷き詰め、12月には、500株の苗を植え付けました。ブルーベリーは根が浅く倒れやすいため、試行錯誤しながら、苗の周囲に誘引線を何本も張り巡らし、風や有害鳥獣の被害から守るためのネットも、自ら張りました。ブルーベリーは酸性土を好むため、pH（水素イオン濃度）を一定に保つよう、定期的にリン酸・カリ・微量要素の入った養液を、点滴かん水で自動的に各鉢へ供給します。この栽培方法では、一年で背丈ほどに苗は成長しますが、せん定さえすれば収穫しやすい高さへの調節が可能。病気が出た場合には、その鉢のみを別の場所に移すだけで、まん延を防げるというメリットもあります。初期投資費用はある程度かかりますが、日常管理といえはpH数値・点滴の点検、圃場巡廻が中心で、まとまった作業は、

今

今年7月の初収穫を目前に、この時期には珍しく上陸した台風に見舞われ、大事に育てた実が落ちたり傷ついたり……。それも丁寧な集め、奥さんの力を借りてジャムに加工。ロスが少ないのもこの果実の魅力です。興味がある人には、自分のノウハウを伝授し、将来的に出荷組合を作りたいと一二さんは考えています。描く夢は、齢を重ねても作業の可能な労働環境と、収益性を兼ね備えた21世紀型農業。「目標は、収穫期を長期化して、品質や価格で輸入品に負けないブルーベリーを作ること。台風対策として早生種も増やし、雇用の場も提供していきたい。確かに不安はありますが、張り合いもあります。どんなことも、やればできると思うのです」と、一二さん。揺るぎない信念と家族の協力を心の支えに、新しい農業への第一歩を、踏み出したばかりです。



宇井一二さん (50歳・高田)

中学を卒業後24歳まで陸上自衛隊に勤務し、ヘリコプターの操縦をしていたという経歴を持つ。会社員として勤務する傍ら農業に従事。家族の協力のもと、一昨年から休耕田を利用したブルーベリーの栽培に取り組む。



あの橋の向こう側へ



今度こそ渡ってみせる。何度そう思ったことだろう。幼いころのボクは、かくれんぼ・鬼ごっこ、何をすることも「みそっかす」。それでもみんなと同じ気分を味わうことができた。そんなボクの前に立ちはだかった1本の橋。体の幅ほどしかないこの橋を、みんなは自転車に乗って颯爽と向こう岸へ渡り切る。その達成感だけは渡った者にしか味わえない。「もしも川に落ちたら…」その恐怖を乗り越えられず、一度も渡ることができなかったボク。あの向こう側へ渡ることが出来たらー。何か自分が変わるような、そんな気がしていた。